

# 児童館の親子と共に

江村綾野

(お茶の水女子大学大学院博士後期課程・保育士)

はじめに

駅前のロータリーから数分歩くと、目の前に高層マンションが幾つも現れ、運河にかかる橋を渡った途端に風が強くなります。数年前から私がかかわっている児童館は、都内湾岸部の新しい街の一角にあります。

今回、『幼児の教育』の編集者の方から「私の保育ノート」に実践報告をといてご依頼をいただきました。この機会に手元のノートから、子どもたちやお父さん、お母さんたちとの日々をご紹介しますと思

## 児童館のある一日

います。

九時三〇分開館。エレベーターの扉が開くと、けんちゃんとお母さんの姿が現れました。けんちゃん親子はすぐ近くの超高層マンションに住んでいて、お姉ちゃんのまゆちゃんは近くの幼稚園に通っています。まゆちゃんを幼稚園に送っていった帰りに児童館で遊ぶのがけんちゃんのマイブームだと、お母さんが話してくれました。お姉ちゃんのまゆちゃんも、一歳前から毎日のようにお弁当を持って児童館

にやって来ていました。まゆちゃんは、午前中、子育て支援室や体育室でめいっぱい遊んだら、早めにお弁当を食べて、そしたら眠くなって、ベビーカーに乗せられたと思っただけで寝て、私たちはうとうとするまゆちゃんを「おやすみ」と送り出すこともよくありました。お母さんが「幼稚園どうしようかな」と悩んでいた時は、「三歳児入園は定員が少なくて難しいかもしれないけれど、だめもとで願書出してみれば?」「幼稚園はいいところよ。子どもはすぐに慣れるけど、お母さんは慣れるのにちょっと時間がかかるかもね」などの相談が続いた日もありました。

十時三〇分。身長と体重の計測が始まります。一番乗りは生後二か月の赤ちゃんとお母さんでした。出産後初めて一人で赤ちゃんを連れて外出したことや、新生児訪問の助産師さんに勧められて来たことを明るく話してくれました。私は「いつでもふらつと遊びに来てくださいね。お母さんの実家はどこ?

パパは手伝ってくれてる?」と、おせっかいな近所のおばさんモード全開で話しかけてしまいました。

十二時。ラウンジでは赤ちゃん連れのお母さんたちのランチが始まりました。その隣のテーブルでは、歌声会の高齢者の皆さんがお茶を飲んでいました。七十代の前田さんは折り紙が得意です。バッグに忍ばせた紙ふうせんを隣のテーブルの子どもに手渡しています。お母さんは少し恐縮した様子でしたが、その紙ふうせんが前田さんと親子をつなげてくれたようでした。

一時。子育て支援室では八か月のゆうちゃんがお母さんと遊んでいました。ゆうちゃんは、はいはいでどこにでも行けるようになって得意そうです。隣で遊んでいた十か月のこうちゃんのおもちゃに手を伸ばすたびに、ゆうちゃんのお母さんはゆうちゃんを「だめだめ」と叱っていました。私が、「どちらからいらっしやいましたか?」と声を掛けると、いつもは家の近所の児童館に行くけれど、今日は足を伸

ばしてこの児童館にやって来たとのことでした。しばらくすると、ゆうちゃんとうちちゃんのお母さん同士で話が始まり、二人のお母さんたちはアドレスを交換したあと、一緒に帰っていきました。

二時三〇分。幼稚園帰りの子どもたちとお母さんたちがにぎやかに登場。持ってきたおやつを食べたあと、子どもたちはプラホーミング（柔らかくて大きい積み木）の部屋に一目散に向かい、その近くでお母さんたちはおしゃべりに夢中です。

三時。学童保育の小学生が帰ってくる時間です。館内は一気に喧騒に包まれます。子どもたちは学童保育室で宿題をして、おやつを食べて、その後は館内の好きな場所で好きな時間を過ごすことができます。コマ・けん玉・メンコ・ボードゲーム・カードゲームなどで遊ぶ子ども、漫画や本を読む子ども、図工室で工作をしたり、体育室でドッジボールをしている子どももいます。しばらくすると家にランドセルを置いた子どもたちもやって来ます。小学生パワーで館内の温度が一気に上昇するのもこの時間帯

です。友達関係がうまくいかないこと、勉強がわからないことなど小学生ならではの悩みを聞くこともよくあります。小学生だからこそ、親でもない先生でもない大人の心のはしごが必要なのでしょう。

六時ごろから部活帰りの中高生たちの姿が見られます。彼らは、年の近い若い若い職員を頼りにしたり、一緒にいることでほっとすることがあるように思います。そして午後八時、児童館の一日が終わります。

### 児童館の子育て支援

全国に多くの児童館がつけられたのは昭和四十年代です。しかし、近年は児童館の役割や機能は大きく変化し、乳幼児から十八歳までの子どもたちの育ちと子育てを支援する施設として進化しました。

今回ご紹介した児童館の特徴は、遊びと子育て支援を縦軸に、乳幼児期から青年期までの子ども達の支援を横軸にしながら、地域の高齢者の方々との世代間の交流が第三軸にあることです。そして、子ども・親・祖父母の三つの世代がそれぞれの時間と

空間を大切にしながら、かつ交流するためのさまざまな活動が行われています。例えば、毎月のお誕生会は三世代合同のお誕生会です。その月に誕生日を迎えた子どもたちを、お母さんやお父さんと高齢者の方々が囲んでお祝いをします。児童館の活動の一つひとつが、子どもと親世代だけでなく祖父母世代も巻き込んでいこうと考えています。

## 地域のプラットホームとして

子どもたちは地域に守られて育ちます。しかし、そもそも東京の真ん中で暮らす人々にとって地域とは何なのでしょう。児童館の仕事の中で見えることの一つは、保育者はそこに住む人々と共にあることで保育者も地域の一員になっていくということだと感じています。

児童館には地域の子どもたちが集います。保育者にとっては、子どもの育ちを長期的に見ることのできる場所でもあります。また、子どもたちの入園・

入学などの節目をうかがうこともできます。保育者が子どもたちの発達を俯瞰しつつ、家庭支援の視点からかかわっていくことは、大きな課題と言えるでしょう。さらに保育者には、世代間交流の場面では祖父母世代の方々と子どもたちをつなげていくという役割も期待されています。

乳幼児を育てる親にとっては、保育所や幼稚園と同様に児童館も地域のプラットホームではないでしょうか。児童館で働く保育者の一人として、子どもたちを中心にして、同時に子どもたちの周囲にある人々の支援にも取り組んでいきたいと思えます。

**注** 本稿では幾つかの事例を再構成しました。本文中に登場する人物名はすべて仮名です。

児童館は、児童センターという呼称を用いている地域もあります。